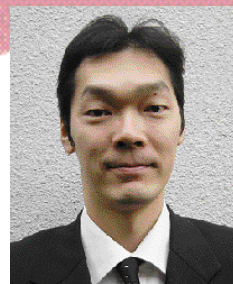


三人寄れば文殊の知恵

巻頭言

特許庁技術講話会 常任委員 酒井 英夫



新年あけましておめでとうございます。

昨年10月19日に特許審査迅速化・効率化推進本部において、「イノベーション促進のための特許審査改革加速プラン」がとりまとめられる等、「特許審査の迅速化」にかかる要請は、今年、平成19年もますます厳しいものとなりそうです。平成18年度の一次審査目標件数は約29万件（前年度比約2割増）とされており、この目標達成に向け、当面頑張っただけですが、特許懇会員の皆様におかれましては、くれぐれも健康に留意されたく思います。審査官が十分な力を発揮してこその特許審査迅速化なのであります。

さて、今年度、特許懇の常任委員を務めることになり、外部の方々とお話をする機会が増えたのですが、みなさんが事あるごとに口を揃えておっしゃるのは、審査官は非常に頑張っている、ということです。どうやってそのモチベーションを維持しているのか、と不思議がられたりもするくらいです。そのように、我々の業務が外部から認められているというのは、なかなか誇らしいものです。

しかし、このような声の裏側で、失っているものもあるのではないかと心配になる時があります。私も現在、特許審査室に身を置いているわけですが、最近感じるのは、審査室が静まりかえっていることです。審査は非常に集中力を要するものですから、審査室が静かであることは悪いことではないのですが、声を発するのもはばかれるような、一種異様な静けさを、時々感じてしまいます。きっと、大量の案件を抱えて、ひとりひとりの気持ちに余裕がなくなっ

ているせいなのでしょうけど、こんな状態が一日中続くようになったら……、などと考えるとちょっと恐ろしくなってしまう。

審査は基本的に1人で進めていく仕事ですから、非常に孤独なものです。そして、非常に高度な判断を要するものですから、長考に入ってしまうこともしばしばです。しかし、1人で悩んでいても煮詰まってしまう、なかなか良い考えは浮かばないのが世の常です。そんな風に判断に迷ってしまったとき、近くの人に気軽に相談できる雰囲気、今の審査室にこそ必要なのではないのでしょうか。昔から、「三人寄れば文殊の知恵」と言うぐらいです。少し話すことで気分転換にもなるでしょうし、気持ちも前向きになる気がします。それは、ひとりひとりが、今よりほんの少しだけ心に余裕を持って、審査にあたることで実現可能なことだと思います。

幸い、現在の審査室には、いろいろな年代の審査官がいますし、様々な職歴を持った任期付審査官の方々もいます。気軽に話せる雰囲気さえあれば、いろいろな考えが出てくる土壌はあると思います。これを生かさない手はないでしょう。特に、これからの特許庁を背負って立つ審査官補や若手審査官にとっては、いろいろな人の意見を吸収し、審査官としての根を広く、たく育ててゆくことは必要なことだと思います。そして、それは将来の特許庁にとっても大きな財産になるものです。

目先の処理件数もちろん大事なことです。我々がどうあるべきか考え、行動することも、審査官として同じくらい大事なことなのではないでしょうか。